

ミカル

I サムエル14:49

18:17-29

19:11-17

25:43-44

II サムエル3:12-16

6:10-23 = I 歴代15:29

- *ミカルはどのような人であったか。
- *ミカルとダビデの夫婦関係はどうであったか。
- *ミカルについて、どのように思うか。
- *ミカルから学ぶことができるとしたら、どのようなことがあるか。
- *今回の学びで、自分の生活に適用したいことがあれば、どのようなことか。

I サムエル 14:49 さて、サウルの息子は、ヨナタン、イシュビ、マルキ・シュア、ふたりの娘の名は、姉がメラブ、妹がミカルであった。

ミカル登場。サウルの娘ミカルの名前が最初に出てくるのがここ。サウルの家族関係を説明する部分での言及。

この時点で、サウル王は、ちょこちょこ神様に対して失態を見せてはいるものの、まだペリシテ人との戦いで勝利を収めている状況下にあった。

ペリシテ人征伐の褒美として娘を与えようとするサウル王

I サムエル18:17-29

18:17 あるとき、サウルはダビデに言った。「これは、私の上の娘メラブだ。これをあなたの妻として与えよう。ただ、私のために勇敢にふるまい、【主】の戦いを戦ってくれ。」サウルは、自分の手を下さないで、ペリシテ人の手を彼に下そう、と思ったのである。

18:18 ダビデはサウルに言った。「私は何者なのでしょう。私の家族、私の父の氏族もイスラエルでは何者なのでしょう。私が王の婿になるなどとは。」サウルは、自分の手を下さないで、ペリシテ人の手を彼に下そう、と思ったのである。

ダビデに対する嫉妬にかられたサウル王はダビデに対し、策略を企てる。自分の手でダビデを殺すのではなく(民に人気のあるダビデを殺しづらいという理由もあった)、敵のペリシテ人を利用してダビデを殺す計画を立てる。後にダビデ自身バテシェバとの姦淫の罪をもみ消すために、この手を使うことになるのだが。

サウル王はペリシテ人征伐の褒美として、自分の長女メラブを与えると約束。ご丁寧に、「私のために勇敢にふるまい」、「【主】の戦いを戦ってくれ」って、王様直々の命令に、ダビデが従わないわけにはいかない。しかも、神、主の戦いと言われて、断るわ

けにもいかない。しかも、褒美は王様の娘、しかも長女。王と姻戚関係を持てるのだから、表向きは悪い話ではない。しかも、成功報酬なので、たなぼたではなく、もったもな取引に見える。

ダビデの反応。

18:18 ダビデはサウルに言った。「私は何者なのでしょう。私の家族、私の父の氏族もイスラエルでは何者なのでしょう。私が王の婿になるなどとは。」

自分の出自が卑しいもので、王の婿になる立場にないと言う。しかし、19 節をみるとペリシテ人征伐でダビデはかなりの手柄を立てたのであろう。そして、実際、結婚話も出たようだが……。

肩透かしを食らったダビデ。

18:19 ところが、サウルの娘メラブをダビデに与える、という時になって、彼女はメホラ人のアデリエルに妻として与えられた。

サウルの娘メラブを嫁にやるとの約束があったにもかかわらず、それを反故にされてしまったダビデ。しかし、メラブとアデリエルの間に子どもがあったので、後にヨナタンの子どものメフィボシェテを救う時に役に立つことになる。小さいレベルだが、神の計らいなのかもしれない。参考) IIサム 21:7 しかし王は、サウルの子ヨナタンの子メフィボシェテを惜しんだ。それは、ダビデとサウルの子ヨナタンとの間で【主】に誓った誓いのためであった。

21:8 王は、アヤの娘リツパがサウルに産んだふたりの子アルモニとメフィボシェテ、それに、サウルの娘メラブがメホラ人バルジライの子アデリエルに産んだ五人の子を取って、

21:9 彼らをギブオン人の手に渡した。それで彼らは、この者たちを山の上で【主】の前に、さらし者にした。これら七人はいっしょに殺された。彼らは、刈り入れ時の初め、大麦の刈り入れの始まったころ、死刑に処せられた。

メラブは自分がダビデに嫁ぐものだとはばかり思っていたかもしれないが、突然別の男に嫁ぐことに。政争の道具として用いられた哀れな女性に思える。そして、随分と後に父サウルのしたことで、自分の子ども 5 人が処刑されることになる。

メラブの一件の後、今度は二女のミカル。このミカルもメラブ同様哀れだが、少なくとも、ミカル自身はダビデのことが好きで、愛していたとはっきり聖書にかかっている。

18:20 サウルの娘ミカルはダビデを愛していた。そのことがサウルに知らされたとき、サウルはそれはちょうどよいと思った。

この昔に、自分の男性の好みをはっきり話すことができたとは、ミカルはかなり自己主張が強そう。そして、そのことがサウル王の耳に入り、サウルに政争の道具として使われてしまう。殺そうと思っている男に自分の娘を褒美に取らせようというサウルもい

つたい、どんな父親なんだって感じですよ。自分の娘が愛しているという男をちらつかせて、それを利用して「それはちょうどよいと思った。」って。

自分の二女ミカルを嫁にやるとダビデに約束するサウル。

18:21 サウルは、「ミカルを彼にやろう。ミカルは彼にとって落とし穴となり、ペリシテ人の手が彼に下るだろう」と思った。そこでサウルはもう一度ダビデに言った。「きょう、あなたは私の婿になるのだ。」

「ミカルは彼にとって落とし穴となり」とは、どういう意味なのか？王の娘をもらうことができるダビデが名誉欲を出して、無理なことをするとでも思ったのだろうか。女性のことダビデが正しい判断ができなくなることを期待したのだろうか。

「きょう、あなたは私の婿になるのだ。」いくら王様の命令でも、えらく性急ではなかろうか。

家来も使うサウル

18:22 そしてサウルは家来たちに命じた。「ダビデにひそかにこう告げなさい。『聞いてください。王はあなたが気に入り、家来たちもみな、あなたを愛しています。今、王の婿になってください。』」

サウルは家来を使って、ダビデにミカルと結婚するように誘導しようとする。王だけでなく家来もみな望んでいることだと。

家来に対するダビデの反応

18:23 それでサウルの家来たちは、このことばをダビデの耳に入れた。するとダビデは言った。「王の婿になるのがたやすいことだと思っているのか。私は貧しく、身分の低い者だ。」

あくまで控えめなダビデ。自分が貧しくて、身分が低く、王様の婿になるのは並大抵のことではないことを自覚していた。花嫁料が払える状況に無かった。

家来からダビデの答えを聞いたサウルが再度提案

18:24 サウルの家来たちは、ダビデがこのように言っています、と言ってサウルに報告した。

18:25 それでサウルは言った。「ダビデにこう言うがよい。王は花嫁料を望んではない。ただ王の敵に復讐するため、ペリシテ人の陽の皮百だけを望んでいる、と。」サウルは、ダビデをペリシテ人の手で倒そうと考えていた。

「ペリシテ人の陽の皮百」とは、すごい要求。割礼を受けていない異邦人のペリシテ人。つまり 100 人ペリシテ人を殺さなければ手に入らない。霊的な意味までひっかけてのサウル王の提案。しかし、これはサウル王がダビデを殺すための陰謀だった。メラブの時は具体的な数字は出していないが、今回は100という数字がでていたので、そ

それを達成するまでダビデは戦い続けなければならぬ。100 人を相手に戦っていれば、そのうちダビデの方がやられて死んでしまうという計画だったのだが…アビガイルが言ったように、神がダビデのいのちを守ってくださった。

ダビデの反応

18:26 サウルの家来たちが、このことばをダビデに告げると、ダビデは、王の婿になるために、それはちょうどよいと思った。そこで、期限が過ぎる前に、

18:27 ダビデは立って、彼と部下とで、出て行き、ペリシテ人二百人を打ち殺し、その陽の皮を持ち帰り、王の婿になるためのことを、王に果たした。そこでサウルは娘ミカルを妻としてダビデに与えた。

サウルの無理難題をダビデは、「ちょうどよいと思った」。これは、どういう意味なんだろう？イスラエルの敵であるペリシテ人をやっつけ、なおかつ王の命令にも従うことができるってこと？それとも、ダビデは王の婿になりたかったのだろうか？それともミカルのことを好きだったのだろうか？女性に好かれて嫌な男性もあまりいないかもしれない。ダビデは、ミカルのことをどう思っていたのだろうか？バテシェバやアビガイルの場合は、ダビデ自身が選んでいるが、ミカルの場合は本人が墓に持って行ってしまった気がする。一つ分かるのは、ミカルがあまり霊的な人物でなかったということ、ダビデが積極的にそのような人を妻にしたいと思うだろうか？ということぐらいだ。ダビデが名誉を選んだと考えるのも難しい。牧師の話では→ **王の婿になるのは、これだけの犠牲を払わなければいけないほど、貴いことだということだ**そうです。

ダビデはサウルの要求の倍のペリシテ人二百人を打ち殺した。王の婿になる条件を十二分に全うして、妻ミカルを手に入れた。

サウルの反応

18:28 こうして、サウルは、【主】がダビデとともにおられ、サウルの娘ミカルがダビデを愛していることを見、また、知った。

18:29 それでサウルは、ますますダビデを恐れた。サウルはいつまでもダビデの敵となった。

ダビデが死ぬことを期待していたのに、当てが外れたサウル。それだけではなく、神がダビデとともにおられたことを目の当たりに見ることになり、また人間的にも自分の娘までダビデを愛していて、自分の思い通りにならないことをダブルパンチで知ることになった。

このことがきっかけで、最後までサウルはダビデを殺すようになったようだ。

I サムエル19:11-17

ダビデ暗殺計画を立てるサウル

19:11 サウルはダビデの家に使者たちを遣わし、彼を見張らせ、朝になって彼を殺

そうとした。ダビデの妻ミカルはダビデに告げて言った。「今夜、あなたのいのちを救わなければ、あすは、あなたは殺されてしまいます。」

父サウルの陰謀に気づいたミカル。愛する夫を救うため、ダビデにそのことを知らせた。

19:12 こうしてミカルはダビデを窓から降ろしたので、彼は逃げて行き、難をのがれた。

ミカルのすばやい対応と知恵で、ダビデは脱出に成功。

19:13 ミカルはテラフィムを取って、それを寝床の上に置き、やぎの毛で編んだものを枕のところに置き、それを着物でおおった。

19:14 サウルがダビデを捕らえようと使者たちを遣わしたとき、ミカルは、「あの人は病気で」と言った。

愛する夫のために、ダビデが寝ているように偽装工作をするミカル。しかし、テラフィムを家に置いているって、何？ミカルは偶像礼拝者だった可能性がある。テラフィムは、ヤコブの妻のラケルがラバンのところから逃げる時に持ち出したことがあったが、持っていることだけで偶像礼拝者と決めつけることは出来ないかもしれないが、じゃあ何のために持っていたのかということになる。ミカルの神への信仰は怪しそうだ。しかも、ダビデが病気でであると嘘をついている。まあ、人の命を救う時の嘘を神は罰しておられる箇所を見つけることができないので(遊女ラハブがイスラエルの斥候をかくまった時など)、この嘘はOKかもしれない。

19:15 サウルはダビデを見ようとして、「あれを寝床のまま、私のところに連れて来い。あれを殺すのだ」と言って使者たちを遣わした。

ダビデを殺そうとするサウルの思いは本気だと分かる。病人を寝床のまま連れてくるように部下に命令するのだから。

19:16 使者たちが入って見ると、なんと、テラフィムが寝床にあり、やぎの毛で編んだものが枕のところにあった。

ミカルの偽装工作はばれてしまうが、ダビデが逃げる時間稼ぎをすることはできた。

19:17 サウルはミカルに言った。「なぜ、このようにして私を欺き、私の敵を逃がし、のがれさせたのか。」ミカルはサウルに言った。「あの人は、『私を逃がしてくれ。私がどうしておまえを殺せよう』と私に言ったのです。」

サウルはダビデのことを「私の敵」と呼んでいる。

ミカルはまたもやダビデが命乞いをしたので、仕方なく逃したと嘘をついている。

これは、言わなくてもいい嘘であることははっきりしている。同じサウルの子のヨナタンとは大違い。I サムエル 19 章の最初の方で、サウルがダビデを殺すことを公言した時に、ヨナタンはダビデを弁護し、父をいさめ、罪を犯さないようにとサウルとダビデの仲を取り持った。ヨナタンは信仰者としての生活をしていたことが分かる。参考) I サムエル19:1-7

19:1 サウルは、ダビデを殺すことを、息子ヨナタンや家来の全部に告げた。しかし、サウルの子ヨナタンはダビデを非常に愛していた。

19:2 それでヨナタンはダビデに告げて言った。「私の父サウルは、あなたを殺そうとしています。それで、あしたの朝は、注意して、隠れ場にとどまり、身を隠してください。」

19:3 私はあなたのいる野原に出て行って、父のそばに立ち、あなたのことについて父に話しましょう。何かわかったら、あなたに知らせましょう。」

19:4 ヨナタンは父サウルにダビデの良いことを話し、父に言った。「王よ。あなたのしもべダビデについて罪を犯さないでください。彼はあなたに対して罪を犯してはいません。かえって、彼のしたことは、あなたにとっては非常に益となっています。」

19:5 彼が自分のいのちをかけて、ペリシテ人を打ったので、【主】は大勝利をイスラエル全体にもたらしてくださったのです。あなたはそれを見て、喜ばれました。なぜ何の理由もなくダビデを殺し、罪のない者の血を流して、罪を犯そうとされるのですか。」

19:6 サウルはヨナタンの言うことを聞き入れた。サウルは誓った。「主は生きておられる。あれは殺されることはない。」

19:7 それで、ヨナタンはダビデを呼んで、このことのすべてを告げた。ヨナタンがダビデをサウルのところに連れて行ったので、ダビデは以前のようにサウルに仕えることになった。

ここからダビデの逃亡生活が始まる。サウルが死ぬまで続く。

ダビデがアビガイルを妻とした時の記述

I サムエル25:43-44

25:43 ダビデはイスラエルの出のアヒノアムをめぐっていたので、ふたりともダビデの妻となった。

25:44 サウルはダビデの妻であった自分の娘ミカルを、ガリムの出のライシュの子パルティに与えていた。

ダビデが逃亡後、サウルはミカルを別の男に嫁がせた。これも政略結婚だったのか？一方ダビデも、サウルの娘のミカルをあきらめたのか、別の妻を設け始めている。

最初の妻ミカルを取り戻そうとするダビデ

II サムエル3:12-16

3:12 アブネルはダビデのところに使いをやって言わせた。「この国はだれのものでしょう。私と契約を結んでください。そうすれば、私は全イスラエルをあなたに移すのに協力します。」

サウルの死後、ヘブロンを都とするダビデ朝とサウル朝の間で長く戦いが続いたが、ダビデ朝はますます勢力を強めていった。サウル朝の将軍アブネルは、もはや戦いを続ける意味を感じなくなり、穏便にダビデに権力を移譲して、統一王国を作れるよう

に話し合いに出た。

3:13 ダビデは言った。「よろしい。あなたと契約を結ぼう。しかし、それには一つの条件がある。というのは、あなたが私に会いに来るとき、まずサウルの娘ミカルを連れて来なければ、あなたは私に会えないだろう。」

ダビデはまずは交渉を始めたアブネルに対し、アブネルに会う条件としてミカルを連れてくるようにとの条件を出した。ダビデは、ミカルを「サウルの娘ミカル」と呼んでいる。「自分の妻であったミカル」と言っていないところから、愛情があつて連れ戻してほしいと言ったのではないことが読み取れる。つまりは、サウル朝とうまくやっていくための政略結婚として「サウルの娘ミカル」が必要だったということだ。

3:14 それからダビデはサウルの子イシュ・ボシエテに使いをやって言わせた。「私がペリシテ人の陽の皮百をもってめとった私の妻ミカルを返していただきたい。」

一方、ダビデはサウル朝の王イシュ・ボシエテに対しても使いを送り、ミカルを返すように要請した。「私がペリシテ人の陽の皮百をもってめとった私の妻ミカル」と、ダビデは自分が犠牲を払って、代価を払って得た妻であったことをイシュ・ボシエテに指摘している。返すのは当然だろうと言わんばかり。

3:15 それでイシュ・ボシエテは人をやり、彼女をその夫、ライシュの子パルティエルから取り返した。

3:16 その夫は泣きながら彼女についてバフリムまで来たが、アブネルが、「もう帰きなさい」と言ったので、彼は帰った。

Ⅱサムエル5:5にダビデがヘブロンでユダを治めていたのが七年六カ月とあるので、おそらく、ミカルとパルティエルは8年間は夫婦として暮らしていたはず、いやもっとかもしれない。しかし、その結婚生活に終止符が打たれる。

上でも言及したが、この時点でダビデがミカルを愛していたから取り戻したと考えるのは難しい。サウル朝を合併吸収するのにサウルの娘ミカルを再び自分の妻にすることで、人心の統一を図ろうとしたと思われる。またしてもミカルは政争の道具に使われることとなる。

ミカルとしても、8年以上も結婚生活を続けたパルティエルと別れなくなかったであろうと思われる。ダビデに対して、懐かしさはあつたとしても、以前ほどの愛情があつたとは思いつらい。しかし、王の妻になれるという名誉欲はあつたかも。ダビデも神の箱の一件までは、ミカルを妻として得た後、そこそこ夫の義務は果たしていたようだ。

契約の箱を取り戻したダビデ

ダビデはイスラエルを統一し、ペリシテ人との戦いに勝ち、国がある程度安定し、サムエルの時代に奪われた後、放置されていた神の箱をエルサレムに運び上ることを考えた。国が安定して、直ぐにしたことが神様の箱を何とかしようというところが、ダビデの霊的にすごいところだ。しかし、Ⅱサムエル6章の初めの方のウザの一件で、運び方を失敗しているので、用意周到に動いている。

Ⅱ サムエル6:10-23

6:10 ダビデは【主】の箱を彼のところ、ダビデの町に移したくなかったので、ガテ人オベデ・エドムの家に戻した。

6:11 こうして、【主】の箱はガテ人オベデ・エドム家に三か月とどまった。【主】はオベデ・エドムと彼の全家を祝福された。

6:12 【主】が神の箱のことで、オベデ・エドムの家と彼に属するすべてのものを祝福された、ということがダビデの王に知らされた。そこでダビデは行って、喜びをもって神の箱をオベデ・エドムの家からダビデの町へ運び上った。

6:13 【主】の箱をかつぐ者たちが六歩進んだとき、ダビデは肥えた牛をいけにえとしてささげた。

神様の怒りが収まったことを確認して、ダビデは自分の住む所の近くに、神の箱を置こうとしている。逃亡生活が長かった時、神様の臨在を強く感じることができた神の箱のある宮での礼拝を恋慕う詩篇をたくさん書いているが、その心がここにも表れている。今ようやく、自由に神様を礼拝することができるようになったのだ。ダビデが神様に捧げた捧げ物は、けた違いの量だった。それだけダビデは神のことを大切に考えていたのだろう。その解放感と喜びが 14 節以降の箇所ですべて具体的に表れているが、その心をミカルは理解していなかった。

6:14 ダビデは、【主】の前で、力の限り踊った。ダビデは亜麻布のエポデをまとっていた。

「【主】の前で、力の限り踊った」ダビデは自分の体を使って、神を精一杯賛美したことが分かる。王服ではなく、神の前に身軽な質素な服装でいたことも、ダビデの気質を表している。

6:15 ダビデとイスラエルの全家は、歓声をあげ、角笛を鳴らして、【主】の箱を運び上った。

ダビデもイスラエルの民みんなも、同じレベルで、神様の箱が来たことを喜んでいる。王も民も一緒になって、神様の臨在を喜んでいる美しい姿が見て取れる。

6:16 【主】の箱はダビデの町に入った。サウルの娘ミカルは窓から見おろし、ダビデ王が【主】の前ではねたり踊ったりしているのを見て、心の中で彼をさげすんだ。

神の箱がダビデの町に入った喜ばしい日に、一人だけ喜んでいない人がいた。それは、ミカル。ここで、聖書の記者はまたしてもミカルのことを、「サウルの娘ミカル」と呼んでいる。

自分の夫が主の前ではねたり踊ったりするのを見て、心の中でさげすんだ。主を喜ぶことをさげすむ妻とはいったい……。この時点でもミカルの信仰はいい加減だったようだ。いや、信仰がなかったのかもしれない。父サウルのように、王はいい格好をしていないといけなさと、うわべばかり考える人であったのかもしれない。そもそも、ミカルがダビデを愛していたとあるが、ダビデの外見が気に入っていただけで、ダビデの霊的指導力にほれ込んでいたわけではないんだということが分かるような出来事だ。妻よ、

夫との霊的なすれ違いに注意！

6:17 こうして彼らは、【主】の箱を運び込み、ダビデがそのために張った天幕の真ん中の場所に安置した。それから、ダビデは【主】の前に、全焼のいけにえと和解のいけにえをささげた。

6:18 ダビデは、全焼のいけにえと和解のいけにえをささげ終えてから、万軍の【主】の御名によって民を祝福した。

6:19 そして民全部、イスラエルの群集全部に、男にも女にも、それぞれ、輪型のパン一個、なつめやしの菓子一個、干しぶどうの菓子一個を分け与えた。こうして民はみな、それぞれ自分の家に帰った。

6:20 ダビデが自分の家族を祝福するために戻ると、サウルの娘ミカルがダビデを迎えに出て来て言った。「イスラエルの王は、きょう、ほんとうに威厳がございましたね。ごろつきが恥ずかしげもなく裸になるように、きょう、あなたは自分の家来のはしための目の前で裸におなりになって。」

ダビデは、まず王として、民を祝福し、その証として、祝いの品を与えている。全員にいきわたるようにしている。霊的な指導力、影響力を発揮するダビデ。

それから、ダビデは今度は、自分の家族を祝福するために戻ったが、出迎えたミカルは「サウルの娘ミカル」と呼ばれている。やっぱり、「ダビデの妻」になれていないミカル。そして、ミカルの口から出た言葉は、当てこすり、心の中でダビデのことをさげすんだことを表すものになっている。

6:21 ダビデはミカルに言った。「あなたの父よりも、その全家よりも、むしろ私を選んで【主】の民イスラエルの君主に任じられた【主】の前なのだ。私はその【主】の前で喜び踊るのだ。」

ダビデも負けてはいない。ミカルに負けず劣らずの皮肉で切り返す。主は、サウルではなく私をイスラエルの王としてお選びになったのだと。

6:22 私はこれより、もっと卑しめられよう。私の目に卑しく見えても、あなたの言うそのはしためたちに、敬われたいのだ。」

ダビデは、自分の部下に敬われる、主を愛することを表すことで、敬われたいと言う。ミカル、おまえより自分の部下の方がまだ、いや部下に愛された方がいいと。

6:23 サウルの娘ミカルには死ぬまで子どもがなかった。

またしても、ミカルは、「サウルの娘ミカル」と呼ばれている。「ダビデの妻ミカル」ではない。部下未満だ。ミカルがサウルに属していたと言いたげだ。

この節は短い、厳しい現実が書かれている。家族を祝福するために来たダビデから祝福を得るところか、ミカルは家庭内離婚の憂き目に遭う。主を慕い求める夫をさげすみ侮辱したことで、ミカルは完全にダビデの愛情を失ってしまうことになる。霊的なすれ違いは恐ろしい。

Ⅱ サムエル6:16と短く同じ内容が書かれている。

I 歴代15:29

15:29 こうして、【主】の契約の箱はダビデの町に入った。サウルの娘ミカルは、窓から見おろし、ダビデ王がとびはねて喜び踊っているのを見て、心の中で彼をさげすんだ。